

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520731

研究課題名(和文) 産業革命期イギリスの貧困と福祉に関する社会史的研究

研究課題名(英文) Poverty and Welfare in early modern England: A Social History

研究代表者

長谷川 貴彦 (HASEGAWA, TAKAHIKO)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：70291226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「メイクシフト・エコノミー」makeshift economy 概念に依拠しながら、産業革命期イギリスの貧困と福祉に関する社会史的研究を行うものである。具体的には、貧民に関する「パーソナル・ナラティブ」「エゴ・ドキュメント」と呼ばれる史料を用いながら、貧困の原因、貧民の生存維持の手段、生存戦略を発見し、またそれらを言語論的転回以降の文化史研究の視座のなかにも位置づけ、「貧民の語り」のレトリックの分析を行うものとなった。

研究成果の概要(英文)：This research project explores the relationship between the pauper letters, the administration of the poor relief and the experience of the English poor for the period 1780-1850. The project mainly concerns with the makeshift economy of the English poor, focusing on specific localities such as London, Essex, Birmingham and Manchester. This project analysed the form, content, rhetoric and usage of poverty narrative, with pauper letters, diaries and so on as its main sources.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：貧困 福祉 メイクシフト 物語 産業革命

## 1. 研究開始当初の背景

伝統的な歴史記述での福祉の歴史とは、福祉国家に一元化されてゆく国家行政の拡大・進化の歴史として描かれてきた。しかし、この歴史観は福祉国家の解体が進行するなかで現実的基盤が失われ、ウェブ史観と呼ばれた福祉国家の単線的発展モデルも再考を余儀なくさせられていった。ウェブ史観に対する批判として「福祉複合体」mixed economy of welfare という概念が登場する。それは、救貧法、慈善団体、相互扶助団体、家族などの中間団体との間の福祉の供給の多元性を強調するものであった。

これまでの研究において申請者の関心もこの点におかれてきたが、そのアプローチの限界を痛感するようになってきた。すなわち、「福祉複合体」論には、制度的な配置関係に関心が置かれ、家族やその他のインフォーマルな社会関係が無視、また、団体を統治する側、つまり「上から」の視点によるもので、慈善の受け手の側からの視点が軽視されているという批判があるからだ。

こうした諸批判のなかで登場してくるのが、「メイクシフト・エコノミー(生存維持経済)」という視点からのアプローチである。「メイクシフト・エコノミー」は、近年、貧困と福祉をめぐるヨーロッパ社会史研究において頻繁に使われることになった概念である。この概念の起源は、オルウェン・ハフトンの絶対王政期フランス社会の貧困研究のなかにあるといわれる。ハフトンは、貧民が日常生活をどのように維持していたかに関心を抱き、この概念を貧民の生存戦略を表現するものとして

提出したのであった。事実、民衆自身の貧困経験を記述した具体的史料の編纂が進んでいる。いわゆる「新しい下からの歴史」の中心的テーマとなっている「貧民の語り」に関する史料である。これらは史料論上、「エゴ・ドキュメント」や「パーソナル・ナラティブ」と呼ばれているのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、「メイクシフト・エコノミー」makeshift economy 概念に依拠しながら、産業革命期イギリスの貧困と福祉に関する社会史的研究を行うものである。具体的には、「貧民の語り」に関する「パーソナル・ナラティブ」「エゴ・ドキュメント」と呼ばれる史料を用いながら、貧困の原因、貧民の生存維持の手段、生存戦略を発見し、それらを言語論的転回以降の文化史研究の視座のなかにも位置づけ、「貧民の語り」のレトリックの分析を行う。

## 3. 研究の方法

本研究は、「貧民の語り」の史料を用いて「メイクシフト・エコノミー」の歴史的な存在形態を明らかにしようとするものである。最近の研究が明らかにしているように、福祉や貧困の形態をめぐっては、イングランド内部にも対照的な地帯構造が存在していた。南部は農業地帯で救貧法に関しても弾力的な運用がなされていたのに対して、北部は救貧法の隙間をヴォランティアズムによって埋めざるを得ず、福祉の供給主体に関しても多角的な資源が存在していたという。

本研究では、この地域的差異に留意しながら、貧民の語りが集積される場を、南部では救貧法当局（教区会）、ロンドンや北部・中部では病院など任意団体に設定して史料収集を行った。時代的には、1780年代から1820、1830年代にこうした史料が散見しうる。これらは刊行資料ではカバーできないので、現地の文書館を訪問した。

収集した史料は、以下の方法で分析された。第一に、貧困の多元的原因の発見である。これまで貧困は、凶作、経済的不況、失業、疫病、政治的争乱などの会的要因によると考えられてきた。しかし、近年の研究では、高齢期、病気、寡婦や孤児になった場合など、個人のライフサイクルのなかでも貧困に陥りやすいリスクな時期があることが発見された。

第二に、そうした貧困に対応する「メイクシフト・エコノミー」の発見である。救貧法やヴォランティア、家族などに加えて、近隣関係、質入れ、慈善、犯罪までもが、生存維持戦略の一貫とみなされており、具体的史料を通じてそれを確認した。

第三に、「貧民の語り」にみられるレトリックの分析である。貧民たちは、独自の「物語の技法」を用いて自らの窮状を訴える手紙を執筆したが、そこにみられる語りのパターンを確認した。

#### 4. 研究成果

本研究は、まだ日本ではほとんど知られていない「メイクシフト・エコノミー」概念に基づく本格的な研究であり、この概念の持つ歴史学的含意を紹介することも価値のあるも

のであった。さらにいえば、これまで産業革命期社会史研究のなかでは、生活水準論争として論じられてきた楽観論・悲観論をめぐる対立にメイクシフト・エコノミー概念に基づく新たな視点からの解釈を提供することになった。

それにとどまらず、本研究は「エゴ・ドキュメント」「パーソナル・ナラティブ」として注目を集める「貧民の語り」に関する史料を用いての実証研究であり、それは刊行史料を用いる研究とは異なり、実証水準でも既存の社会史研究の水準を乗り越える成果を示しえた。また本研究は、物語論やパフォーマンス論などの文化史研究の最近の潮流にも倣さずものとなり、方法論や理論についても考察をめぐらすことができた。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

、長谷川貴彦「語りのかたち パーソナル・ナラティブの歴史学」『西洋史学』251号、2014年5月、査読無。

、長谷川貴彦「文化史研究の射程 「転回」以降の歴史学のなかで」、「特集 ピーター・パークの仕事」『思想』1074号、6-20頁、2013年10月、査読無。

、長谷川貴彦「二宮史学との対話 歴史学の転換点に」、東京外国語大学海外事情研究所編『Quadrante』第15号、11-18頁、2013年3月、査読無。

、長谷川貴彦「パーソナル・ナラティブ論の射程 現代歴史学の課題と展望」、多宗教・多文化の歴史研究所(明治大学)『多宗教・多文

化の歴史研究所ディスカッション・ペーパー』  
No.2、3-29 頁、2012 年 7 月、査読無。

、長谷川貴彦「イギリス労働者文化のメタ  
ヒストリー 『経験』から『物語』への転回」、  
『歴史評論』537 号、67-79 頁、2011 年 9 月、  
査読無。

、長谷川貴彦「物語の復権 / 主体の復権  
ポスト言語論的転回の歴史学」、『思想』1036  
号、146-160 頁、2010 年 8 月、査読無。

〔学会発表〕(計 12 件)

、長谷川貴彦、“Poverty and Welfare in  
early modern England: The Origin of  
British Welfare State”, *Changing Civil  
Society and Governance: Perspectives from  
Europe and Japan*, Leuvan University, 22  
March 2014.

、長谷川貴彦「「福祉」への歴史的アプロー  
チ 近世・近代移行期のイギリスを事例とし  
て」、政治経済学・経済史学会秋季学術大会、  
下関市立大学、2013 年 10 月 19 日。

、長谷川貴彦「東アジアの西洋史学」、日本  
西洋史学会大会シンポジウム、京都大学、2013  
年 5 月 11 日。

、長谷川貴彦「現代歴史学の挑戦 イギリ  
スの経験から」、歴史学研究会創立 80 周年記  
念シンポジウム「歴史学のアクチュアリティ」、  
明治大学、2012 年 12 月 15 日。

、長谷川貴彦「ピーター・パーク教授への  
コメント」、東洋大学人間総合科学研究所 10  
周年記念国際シンポジウム「文化と歴史：ト  
ランスマシヨナル・カルチュラルヒストリー  
の今後」、東洋大学、2012 年 10 月 14 日。

、長谷川貴彦「社会運動史とニューレフト  
史学」、東洋大学人間総合科学研究所シンポ  
ジウム「社会運動史の時代」、東洋大学、2012  
年 6 月 3 日。

、長谷川貴彦「二宮史学との対話 歴史学  
の転換点に」、東京外国語大学海外事情研究  
所・日仏歴史学会主催、岩波書店共催、シン  
ポジウム「歴史からの問い、歴史への問い 二  
宮宏之と歴史学」、東京外国語大学、2012 年  
6 月 2 日。

、長谷川貴彦「問題提起」、日本西洋史学  
会第 62 回大会シンポジウム「語りのかたち  
パーソナル・ナラティブの歴史学」、明治大  
学、2012 年 5 月 20 日。

、長谷川貴彦「パーソナル・ナラティブ論  
の射程 現代歴史学の課題と方法」、明治大  
学史学科特別講演、明治大学、2011 年 11 月  
22 日。

、長谷川貴彦「言語論的転回と文化史」、  
遅塚忠躬先生追悼記念シンポジウム「これま  
での歴史学、これからの歴史学 遅塚忠躬先  
生からのメッセージ」、青山学院大学、2011  
年 10 月 16 日。

、長谷川貴彦「ヨーロッパ福祉国家研究へ  
の視座」、社会経済史学会第 79 回全国大会シ  
ンポジウム「『福祉の複合体』の国際比較史：  
第一次大戦前夜の間団体と国家福祉」、関  
西学院大学、2010 年 6 月 19 日。

、長谷川貴彦「ヘイドン・ホワイト教授へ  
のコメント」、ヘイドン・ホワイト招聘国際セ  
ミナー「歴史学とポストモダニズム、  
Re-Figuring Hayden White」、東洋大学、2009  
年 10 月 23 日。

〔図書〕(計2件)

、長谷川貴彦、東京大学出版会、『イギリス福祉国家の歴史的源流 近世・近代転換期の中間団体』2014年3月刊、全270頁。

、長谷川貴彦、山川出版社、『産業革命』(世界史リブレット116) 2012年11月、全90頁。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 貴彦 (HASEGAWA Takahiko) 北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 70291228

